

4-1-6-8 皮膚科

1. 概要と特色

1965 年以来、国立小児病院から継続して、わが国で数少ない小児専門皮膚科の筆頭として活動している。

0 歳から 15 歳以上まで、一人の患者を一人の医師が継続して経過観察しているケースも多い。

すなわち長期間にわたる小児皮膚疾患の統計的データをもつ。

2. 外来診療

一般的な湿疹を代表とする小児皮膚疾患を、早期から適切に治療することを目的とする。アトピー性皮膚炎は、湿疹として皮膚外用療法を適切に行い、皮膚生理学に基づいた知識を用いたスキンケア指導をおこない、社会問題化しているとさえいわれるこの疾患であるが、特別な問題もなく短期間で寛解させ家族に喜ばれている。

もちろん、必要な場合には、アレルギー検査、指導もおこなっている。

湿疹に続いて多い、小児感染症は、細菌性、ウイルス性ともに、まず臨床的な診断を的確に行い、原因の検索と治療を行う。学校保健、保育園への指導も行う。

先天性疾患、母斑症などを皮膚科診断学、皮膚病理学において的確にまた早期に診断をくだし、必要な検索および出来る限りの治療を行う。

あざのレーザー治療、小腫瘍の摘出などの小手術を積極的に行っている。とくにあざのレーザー治療は、開院以来徐々に需要が増え、1 ヶ月に平均 40 名に対して施行している。本人、家族の要望に応えるようにしている。この場合、外来での無麻酔ないしは局所麻酔下に行うことが 7 割、3 割は顔面や広範囲のもので、これらは安全性と本人の苦痛を軽減するため全身麻酔下に行っている。

3. 入院診療

入院治療は重症化したアトピー性皮膚炎、感染症、レーザー治療や手術の前後の患者に対して行っている。

他科の入院患者の往診は 1 日に 10 名前後依頼されて行っている。

褥瘡チームとしての立ち上げに協力し、褥瘡治療の基本をスタッフに指導してきた。現在も週 1 回の回診を定期的に実行している。

4. 講演活動

小児科医、皮膚科医、保育師、一般市民などを対象に講演活動を行い、小児皮膚科学のわかりやすい基礎知識や、予防医学上重要なスキンケアの実践方法などを指導している。